

日本語教員養成 プログラム

大妻女子大学文学部には「日本語教員養成プログラム」という独自のプログラムがあります。文学部の日本文学科・英語英文学科・コミュニケーション文化学科の3学科の学生が、それぞれの学科の学修に加えて学ぶことができる学科横断型プログラムです。



国家資格「登録日本語教員」について

日本語教師は、日本語を母語としない人たちに対して、外国語として日本語を教える専門家です。近年の日本語教師の需要増で日本語教師の質と量を確保する必要があり、2024年4月に日本語教師は「登録日本語教員」として国家資格となりました。

文学部日本語教員プログラムは、2025年5月30日付で文部科学大臣より認定を受けて「登録日本語教員養成機関(C0241314)・登録実践研修機関(B0241312)」として登録されました。

プログラムを履修すると

日本語教員養成プログラムを修了した学生は、登録日本語教員資格取得に必要な日本語教員試験（基礎試験・応用試験）のうち、基礎試験が免除となります。本学のプログラムの学びは、国際社会で様々な仕事をしたい方にとっての大きな力となるでしょう。

文学部日本語教員養成プログラムとは？

日本語教育に必要な知識と教育技術を学ぶ、大妻女子大学文学部独自の学修プログラムです。日本語教育・日本語・日本文化・異文化理解・国際協力・地政学等につながるのある知識を活かしてスキルをみがきます。

文学部の3つの学科を横断する学びの場

大妻女子大学文学部の3つの学科では、「ことば」をキーワードに関連領域を幅広く学ぶことができます。日本文学科・英語英文学科・コミュニケーション文化学科の専門的学びを活かしつつ、日本語教育という社会に貢献できる知識・技術を身につけます。

文学部の「ことば」の学び + 日本語教育に必要な広い知識と技術

文学部の カリキュラム

日本文学科の 専門的学び

日本語学・日本文学・漢文学から、日本語のしくみや運用、日本の文化・歴史の深い学び

英語英文学科の 専門的学び

英語学・英文学・英語教育学から、言語のしくみや運用・国際交流・国際協力の深い学び

コミュニケーション文化学科の 専門的学び

言語・異文化コミュニケーションと表象・メディアコミュニケーション、社会・政策コミュニケーションについての深い学び

文学部日本語教員 養成プログラムのカリキュラム

A「言語学」、B「日本語学」、C「日本語教育」、D「言語と社会・文化・地域」、E「言語と心理コミュニケーション」の5分野の科目群の中から、必修科目を含む14科目（26単位）を履修します。

必修 科目

一般言語学	日本語学要説
日本語教授法Ⅰ	日本語教材研究Ⅰ
日本語教育実習Ⅰ	日本語教育実習Ⅱ
日本語教育学特殊講義 (社会と言語)	日本語教育学特殊講義 (心理と言語)

選択 科目 (例)

日本語教授法Ⅱ	日本語の歴史
日本語教育学演習Ⅰ	英語と日本語
日本語と社会	東南アジア地域研究



大妻女子大学文学部

〒102-8357 東京都千代田区三番町12
Email: japanese-edu@ml.otsuma.ac.jp



学生に 聞きました

英語英文学科2年
春原美幸さん



1. 日本語教員養成プログラムを履修しようと思ったきっかけは？

私はもともと海外に関心がありました。母がフィリピン出身で、高校でも国際交流活動が盛んでした。また、浅草でのアルバイト経験を通して外国からの旅行者と接する機会が多かったことや、現在、留学生を支援する国際交流団体に所属していることも影響していると思います。

そんな中で、大学から日本語教員養成プログラムに関する案内メールが届き、自分の関心にも合っていると感じて、履修したいと思いました。

2. 現在、どのような授業を受けていますか？

「日本語教育学特殊講義（社会と言語）」を受講しています。この授業では、ことばが社会や文化とどのように関わっているのかをテーマに、さまざまな事例を通して考えています。たとえば、日本では贈り物もらった相手に後日「先日はありがとうございました」とお礼をするのが一般的ですが、韓国ではそうした感謝をあえて口にしないこともあるそうです。「まだ何かを求めているのでは」と受け取られてしまうことがあるからで

す。また、日本語と英語の発想の違いや、手話についてなど、言語をさまざまな視点から学べる内容になっています。

3. 将来の目標を教えてください。

将来、日本語教師になると決めているわけではありません。現在は客室乗務員を目指しています。日本の航空会社ではなく、外資系の会社で働きたいと考えています。そのような環境では外国語で人と接する場面が増えるはずで、そこで日本語と日本語教育の知識があることは、自分にとって大きな強みになると思います。日本語は母語として深く考えずに使えるからこそ、その仕組みや文化とのつながりを学ぶことで、外国語に対する見方も深まると感じています。